

化が考えられ、本方法はその原因に作用し、通常の観血的治療の前に試みられるべき治療と考えられた。

67. Bipolar 型人工骨頭の inner head が脱臼した 2 例

笠原悌司, 村田忠男, 原田義忠
野平勲一, 佐々木健, 染屋政幸
石田三郎, 山中 力
(県千葉リハセンター)
土田豊実 (千大)

いずれも high density polyethylene liner の摩耗が脱臼の原因になっていた。non self-centering type は内反位に固定され脱臼した。self-centering type は, outer bearing の動きが多くなり臼蓋側骨破壊が進行, 人工骨頭の head component instability が増大し, 更に HDP の摩耗が進み interlocking ring が破損して脱臼した。関節包の組織像で大量の HDP debris と macrophage が認められ, これが臼蓋側骨破壊の誘因と考えられた。

68. 人工骨頭ステム近傍に生じた大腿骨骨折の治療経験

萩原義信, 大木健資, 林 謙二
新井 元 (国立国府台)
白土英明 (船橋整形外科)

人工骨頭置換術後や人工股関節全置換術後の大腿骨骨幹部骨折はそれほど多く発生するものではない。今回われわれはこの骨折に対して, プレート固定を用いて比較的満足すべき結果が得られた 2 症例を経験したので, 若干の文献的考察を交えてこれを報告した。

69. 人工骨頭置換術後再手術施行症例の検討

中川晃一, 大井利夫, 大西 正康
矢作龍二, 畑 芳春, 池之上純男
井上雅俊 (上都賀)

術後再手術を要した 10 例を含む人工骨頭置換術施行症例 46 例を検討した結果, 再手術の原因として proximal migration と stem の loosening が重要であった。前者は若年者に多く, また distal migration をおこしている症例では起きにくい傾向にあった。後者は Bipolar 型人工骨頭において outer head が内反位にあるものに目立ち, 注意を要すると思われた。

70. 当院における大腿骨頭部内側骨折に対する骨接合術の成績

宮崎達也, 三枝 修, 斎藤正仁
西川 悟, 西垣浩光 (成田日赤)

過去 5 年間の手術例 27 例を検討した。65 歳未満の若年者群 (14 例) に対しては, Garden 分類の骨折型にかかわらず全例に骨接合術を行い, すべてに骨癒合を得た。しかし, IV 型 1 例に segmental necrosis を生じた。65 歳以上の高齢者群 (13 例) では, I・II 型および全身状態不良の III 型例に骨接合術を行ったが, III 型の 2 例が偽関節となった。骨癒合を得たもののうち I 型 1 例に massive necrosis, II 型 1 例に segmental necrosis を生じ, 骨頭壊死発生が本骨折の問題点であることが再確認された。

71. 不安定型大腿骨転子部骨折の検討

稲田邦匡, 重田博夫, 磯辺啓二郎
山岡昭義, 根本哲治, 斎藤 隆
(船橋中央)

Tronzo 分類にて unstable type と診断された 20 例につき検討を加えた。Jensen の定基準に基づくと, Tronzo 分類 unstable type の診断の一致率は 100 % と高い値を示した。またわれわれは, 側面像における中枢骨片の前後捻異常と前後への転位を Neck-Shaft angle, Displaced ratio として計測した。それらは, 後方支持組織の破壊度を示す間接的な示標の 1 つとなり得るものと考えられた。

72. 当院における大腿骨骨折髓内釘固定後の下肢 alignment の検討

安原晃一, 小野 豊, 山越弘明
(長生病院)
金 民世 (千大)

1986 年～92 年の間に当院において大腿骨骨折に対し髓内釘固定術を施行した 12 例 12 骨折につき術後の回旋変形および加重線の変位につき検討した。12 例中 11 例に平均 8.8 度の外旋変形を認めた。加重線はわずかに外側に変位していた。両者と骨折型, 骨折部位との関係は認められなかった。これら alignment の変化の要因につき考察した。